IATSSフォーラム10年のあゆみ

1994年10月20日、IATSSフォーラムの建物がある鈴鹿サーキットでその設立十周年記念の式典が催された。見事な秋晴の一日だった。筆者(重田)はプロジェクトの段階からこの事業に参画した一人として、深い感慨を押さえる事は出来なかった。10年が経過したのである。長い、時には辛い事もあった10年だった。

IATSSフォーラムは、本田技研工業株式会社の創設者本田宗一郎、藤澤武夫両氏の発案と基金により発足した。東南アジアの若い有為な青年達、自国の各分野で指導者となりうる人達に日本の鈴鹿に来てもらい、“共に生活し、共に学ぶ”、それがテーマである。IATSSフォーラムのプログラムは極めてユニークであると言われているが、何故ユニークなのか、そしてこの10年間に何があったのか、どんなインパクトを周囲に与えたのか、それらをこれから述べたい。

フォーラム活動のある一日

〔マラヤ大学での参加者選抜審査会の情景〕

「貴方は日本からどんな事を学びたいですか」

「貴方はマレーシアの何を他の東南アジアから来る仲間達に知ってもらいたいですか」

「IATSSフォーラムには異なった文化と価値観を持ったアジアの若者達が集まります。助け合いながら、仲良く、長期間共同生活をやっていけると思いますか」

いろいろな質問が飛び交う。緊張した中にも笑いが絶えない審査風景である。

ここはクアラルンプールのマラヤ大学の会議室。ブーゲンビリヤの咲き乱れる丘の上の建物である。中央に座っているのは、マラヤ大学の元副学長でIATSSフォーラムマレーシア委員会の委員長、ウンク A.アジズ教授、片側にはIATSSフォーラム実行委員長の岡村總吾教授、反対側の席には、マラヤ大学副学長代理のナワウィ教授、他の委員の方々に続いて、十年来、事務局をお願いしているビオレッタ・フェルナンドさんが記録をとっている。

このようにしてIATSSフォーラムの参加者は最終面談で選考されるのである。

IATSSフォーラム（三重県鈴鹿市）

同じような審査光景がシンガポールで、フィリピンで、インドネシアで、タイで毎年展開される。国によっては面談審査の為に丸一日が費やされる事がたびたびある。IATSSフォーラムのユニークさの一つは間違いなくここにある。応募が始まって、最終的に参加者が決定されるまで実に9ヶ月を費やすのである。応募書類の審査、現地委員と日本の学会、実業界、政府の有識者による2回にわたる厳密な論文審査、最後に現地での面談審査である。ここまで厳しく選考を実施するプログラムは他に少ないのではなかろうか。それだけに優秀な若者達が選ばれてくるのである。

〔鈴鹿でのある一日〕

朝、9時30分。IATSSフォーラムのレクチャーホールである。5ヶ国からの参加者18名と日本人の参加者2名も席に着いている。今日は公開講座で、鈴鹿市近隣の主婦数名、男性のサラリーマンも1、2名いる。女性はご主人と共に海外生活の経験があり、英語がわかる人達など。男性は有休をとって参加しているのだろう。

今日の講師の紹介が終わり、タイからの女性参加者が、伝統的な田園地帯である北東地方の農業形態の説明から始め、タイ社会全体の工業化が進むにつれて、農民の生活がどのように変わりつつあるか、その変化についていけない冷酷な現実をも含めて、実例を上げて説明している。

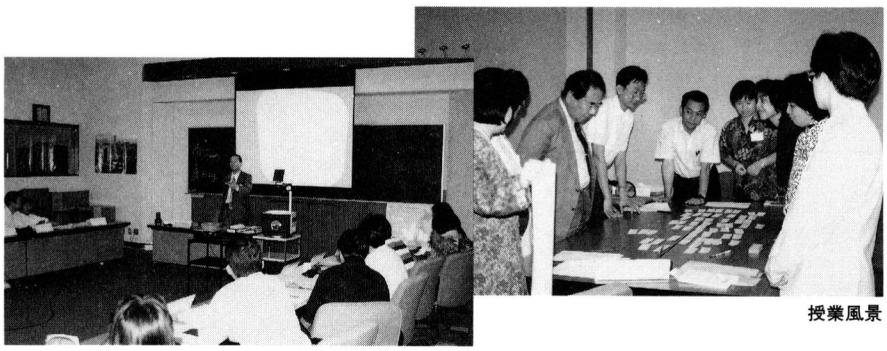
今日のテーマは『日本の農業とその課題』である。講師による講義が始まる前に、参加者が関連テーマを約30分プレゼンテーションする。後に続く講師の話とあわせていわば比較研究と議論が展開するのである。このように、国家社会のいろいろな側面、つまり政治、教育、法制度、外交問題、企業活動等広範なテーマが語られ、議論される。

このような講座は2ヶ月半の鈴鹿滞在中に約27講座用意される。ほとんどの講座が朝9時に始まり、午後4時まで続く。相互関連のある多面的な学習を通じて、日本と日本人社会をありのままに理解してもらおう、という試みである。その方法論は、単に現時点の断面を観察してもらうにとどめず、その生い立ちの背景にまで遡り、日本と日本人社会の近代化のプロセスという文脈で、我々のすべてを見てもらおうということである。

日本と日本人社会について一断面からのみではなく、いろいろなセクターが関連し合い、時には相乗効果を出しながら、また、時にはお互いの力を無益に削ぎながら、日々変わりつつある有機体のように併存しているさまを、三次元的に、立体的にみて貰おうという試みである。書物や報道では表れない優れた点と救いようのないように見える弱点も含めてである。

同じアジア圏にありながら、独特の発展を成し遂げた国を客観的に観察するチャンスが与えられるということは、今現在発展を続けている国々の若い中堅指導者にとって、振り返って自分達の国を考えるに際して、自国の持っているポテンシャル、自国の課題や弱点を把握するのに、大いに役立つに違いない……。これが故本田宗一郎氏と故藤澤武夫氏が、IATSSフォーラムを発案するにあたって、めざしたものである。

上述の講座グループは、勿論、IATSSフォーラム・プログラムの中心を占めるものである。しかし、それ以外に重要な意味合いを持つ二つの学習活動が



授業風景

ある。

一つは鈴鹿近在の住民との交流である。それは例えば、子供の教育の問題だったり、世代間の生き方の違いを如何に克服するかといった、共通の話題についての討論会だったり、食料問題だったりする。お互いの伝統文化、芸能の紹介もある。インドネシアのPh.D.を持った政府の役人である女性参加者が門外不出の中央ジャワ宮廷舞踊を披露してくれ、その優雅さに圧倒されるというようなこともあった。名古屋を中心とする都会地と、田園地帯である三重県でのホームステイもある。日本の家庭に飛び込んで、その中で展開する「子育て」「老人夫妻と若夫婦との微妙な人間関係」「親戚・近所付合い」などを垣間見て、自分達の生活様式との類似点、相違点を知る。これらは書物や報道には決して表れない日本人の理解に、欠かせない学習行為と言えよう。単に日本を理解するにとどまらず自分達の伝統的なライフ・スタイルを改めて考え直してみる場を与えている。まったく同じことが受け入れた日本人家族についても言えるのである。

また、IATSSフォーラム・プログラムのユニークさの一つに、東南アジア言語教室があろう。約70日に及ぶ鈴鹿滞在を機に、各国の参加者が、鈴鹿近隣の家庭の主婦、サラリーマン、学校の教師に自分達の母国語を教えるのである。つまり、シンガポールからの参加者は英語や中国語を、マレーシア参加者はバハサ・マレーシアを、タイ参加者、インドネシア参加者は各々タイ語、バハサ・インドネシアをといった風に。子供が幼い頃、お母さんから習った歌は決して忘れない、というだけでなく、そこには決して忘れない親密関係が生まれる。愛情といってよいだろう。その様な関係が、東南アジアの参加者の先生と、日本人の生徒の間に芽生えてくる。

二つめは、IATSSフォーラムの学習の中核をなす「グループ研究」である。いわばフォーラムの卒業研究に相当する。

共通点を多く持つもののそれでも違う思考様式を持つ5ヶ国の人達と日本人参加者も加わって、日本の特異な社会現象を調査研究するのである。「何故日本人は老いも若きも、男も女も、あれほどパチンコに夢中になっているんだろう」「日本にはポルノ風の雑誌、ビデオが至る所に氾濫している。青少年に悪い影響を与えないのだろうか」「国際結婚を日本人はどう捉えているのだろう。日本の伝統文化との絡みで危機感は感じないのだろうか」といったものが、最近取り上げられたテーマである。グループメンバーは、長い討論の後、方法論を作り、フォーラム事務局の通訳を通して、巷に散っていく。そして、パチンコ家の主人、警察署長、若い婦人警官、ポルノビデオ店の店主などに会う。教室での学習だけでは出会えないタイプの日本人と話し込むのである。大学の教授や、政府の官僚が決して語らない日本を知るのである。かくしてレポートをまとめ、東京で発表し国へ帰っていく。過去10年間に382名の

日本人をみて自身の人生観・価値観を拡げた

シンガポール
グレース・ワイ・ラン（女性）
オートメイション・リース社

フォーラムに参加して私の人生観・価値観が変わったという事はなく、むしろ日本人を観察することによって、私自身の人生観・価値観が強化拡大されたと考えます。

日本人がもっている謙譲の心、慎ましさ、忍耐心、堅忍不抜、尊敬の心、寛容さ－これらの美徳が各個人の中に共存しているのを観察しました。同時に日本人がその弱さ故にある過ちに陥っているのもみました。

若者がいろいろな日本と日本人感を抱いて帰って行った。

〔かつての参加者からの手紙〕

10年を経過して、かつての参加者達は今、フォーラムをどのように考えているのだろう。

コラムに2名からの手紙をそのまま掲載した。もっと多くの手紙を引用したいが、確実に言える事は、ほとんど全ての手紙が、日本と日本人に対する、深く懐かしい思い入れに満ちている。

いや嘘だ、みんなお世辞にすぎない、といって片付けるべきか。いや変に詮索するのは不毛な試みに過ぎない。彼らは心からそう思って手紙を書いて来たのだ、素直に耳をかそう、と少なくとも私自身は思い、自信と誇りの糧にしている。

IATSSフォーラムの生い立ち

以上述べてきたのがIATSSフォーラムのプログラムの概要である。このようなIATSSフォーラムはどのようにして生まれて来たのか、振り返ってみたい。

〔故本田・藤澤の発案と基金により設立〕

故本田宗一郎氏が、本田技研工業株式会社の社長を退任した翌年、東南アジア諸国を訪れた。その時に表敬訪問したのが、当時から現在までマレーシアの首相のポストにあるマハティール首相である。医学博士でもある同首相は、英国一辺倒の上流階級出身の歴代の首相と異なり、独立心の強い荒馬的な政治家である。彼の書いた『マレージレンマ』はマレーシア社会で物議をかもし、長らく政治家として冷や飯を食っていた。本田宗一郎氏とマハティール首相は共に一脈通じるものがあったのだろう。同首相の説く「ルック・イースト政策」は深く本田宗一郎氏を動かし、本田氏個人としてのマレーシアへの建国の一助が約束された。こうした本田氏のマレーシアへの思いが、IATSSフォーラム誕生の発端である。その当時日本社会の様々な分野で「国際化」が叫び始められていたが、多くは掛声だけにとどまり、具体的な動きは、ほとんど見られなかった。

その後、本田宗一郎氏と同時に副社長を退任した藤澤武夫氏も本田氏のIATSSフォーラムの構想に同調し、藤澤氏からも資金の提供があった。IATSSフォーラムのあり方についていろいろ議論した後に、現在のような形態に固まっていったのである。

私たちは自動車やオートバイを作ってきた本田技研にこうした本田・藤澤氏のアイデアを実現させることが出来るだろうかという危惧を感じながら、い

日本とアメリカ両極端を観察して

マレーシア
ジェフリー・リム（男性）
医療会社経営（在アメリカ）

私の日本観は、良いほうに強化されました。それまで西欧から来るものだけが良いと考えていました。今は西欧にも良いものがあるが、東洋にも良いものがあると変わりました。

特に経営方式については、日本のそれを越えるものは世界広しといえ、他に無いでしょう。価値観について言えば、フォーラムに参加して、日本人の価値観を知って言葉では言えないほど、豊かになりました。

私は今ここアメリカに住み、仕事をしていますが、日本の強さに対するアメリカ人のいろいろな反応に直面します。ここではジャパン・バッシングと言っていますが、それを聞くたびに腹が立ちます。多くのアメリカの社会、政治、経済上の問題は、彼らが最も基本的な価値－勤勉さ、規律を失ったという事の一言に尽きます。自分勝手さと恥知らずさです。

日本とアメリカの両方を経験している一人として、この両国民の価値観の極端な違いを観察して、どちらが良いのか悪いのかをよく理解している一人だと思っています。

ろいろな分野のスタッフが集められていった。広報マンが居たり、法律専門家が居たりした。筆者も当時アフリカで駐在員事務所長として働いていたが、連れ戻された。

〔初めてのマレーシア参加者達12名〕

日本人にとって「国際化」とは、異文化を知り、理解し、その相違に寛容の念であたる。文化的な違いによって起きる摩擦を如何に話合いと忍耐力で平和に克服するかこそ、その目的とするところだ。

しかし、頭の中では良く心得ていたが、現実として何と難しいことなのであろう。気負えば気負うほど、越えられぬ距離感に気落ちしていった。大学の講師、高校の教師、医師、土建会社の社長。みな立派な人には違いなかった。でも日本人と違うのである。克服できない相違が厳然として立ちはだかっているのだ。筆者は心労で、20日間入院を余儀なくされたのを覚えている。

第2回に来たマレーシアとの参加者とこんなことがあった。関西研修旅行の時のことである。神戸に有名な回教モスクがあるのを知った、予定を変更して、1日かけ神戸に行き、モスレムの参加者だけで礼拝したい、よってスケジュールを変更してくれというのである。それに対して、訪問先と既に綿密な予定が組んであり、今ここに至って訪問スケジュールを変更できないと答えた。参加者と事務局の間に、険悪な空気が漂った。それに加えて、より難しい問題が起きた。モスレムの参加者の一人が奥さんを連れて来て、プログラムが終わるまで約1ヶ月同室するというのだ。フォーラムのルールでは、3日までは滞在してもよい。その後は必要なら、こちらで用意する近くのホテルに移動するというのが事前説明した規則だった。彼は妻と同室で滞在することを主張し、こちらは譲らなかった。ついに彼は彼に同調する参加者を連れ、黙って消えてしまった。このくらい事務局全体に挫折感を与えた事件はなかった。自信を失い、無力感から長期間立ち上がれなかった。

1991年9月マレーシアのクアラルンプールで第1回国際IATSSフォーラム同窓会を開催した時、つまりこの事件があって5年目のことである。準備委員会のスタッフとして、無断でフォーラムを去った一人がかいがいしく働いているのを見た。一瞬胸が詰まり、無言の固い握手を交わした。あの事件後、「お互いに成長したね」とお互いに沈黙の内に言い合った。

次第に、フォーラムのプログラムは充実してゆき、事務局スタッフも余裕を持って仕事に没入できるようになった。その後もいろいろな文化的相違による問題は発生したものの、事前に回避したり、起きても建設的に対応する力を身に付けていった。参加者と事務局のスタッフの信頼関係はますます濃密になっていった。

〔雨ニモ負ケズ〕

もし、IATSSフォーラムの国際交流の努力を「たたかい」と呼ぶなら、もう一つの戦いは次のように言えよう。あらゆるところで国際化の努力が叫ばれながら、まだまだその地盤が軟弱な日本で、如何に生き延び、根を深くし、確固とした存在にするかということであろう。事実、倒れるほどの揺さぶりが引き続いて起こった。

「研究法人である国際交通安全学会が何故『国際交流事業』をやっているのだ。認可の主旨と違うではないか」という関係当局からの非公式な声が聞こえ

課外授業（小学校訪問）

て来たのである。たった6年前のことであるが、まだ、国際交流がおとなの仕事として「認知」されていなかったのだ。IATSSフォーラムの研修は日本と日本人に関する学際的、総合的な研究であり、優れた論文も公表されている。これについては現IATSSフォーラム実行委員長の岡村總吾教授のご尽力で、関係当局へご説明いただき、充分ご理解を戴いた。6年を経過した現在、他のどの研究団体もその必要性を感じ、躍起になっているのは皮肉である。

4年前からの経済不況で、IATSSフォーラムの存立が危うくなったことがある。そしてその状態は現在までも継続している。予算は減額され、事業規模も縮小せざるを得なかった。にもかかわらずIATSSフォーラムの意義は東南アジア諸国でも、国内でも少しずつ確実に評価され、尊敬の念で見られ始めている。その質を高め、これからの国際社会により大きなインパクトを与えるべく、IATSSフォーラム実行委員会と鈴鹿の事務局はその努力を続けたい。その努力の一端として、近い将来、ヴェトナムと中国からの参加者招待に向けてそのフィージビリティ・チェックを1995年から始めようとしている。

将来に向かって

第3回の国際諮問委員会の席上で、マレーシアのIATSSフォーラムマレーシア委員長ウンク A.アジズ教授からASEAN加盟国であるブルナイのフォーラム参加が提案され、可決された。その後2年間にわたり、参加に関する交渉が続けられたが、基本論では、IATSSフォーラム参加に意欲的であったが、実務レベルで大きな意見の相違があり、現在は折衝を中断している。その間、ヴェトナムが長く閉ざされていた門戸を開き、1995年からASEANに加盟することが決定した。このヴェトナムの参加に向かって、調査活動をすることが、前回のIATSSフォーラム実行委員会で了承された。

10年前にフォーラムを始めた時に比べ、東南アジア圏は驚異的な変貌を遂げている。ここ数年間にもっと大きな変化を示すだろう。

その中で、新しい世界を構築する為の一寄与として、IATSSフォーラムを続けていきたい。

（IATSSフォーラム鈴鹿所長　重田隆康）

IATSSフォーラム修了式